九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

エリザベス朝における戯曲本の「人気」を検証する

太田, 一昭
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/6796483

出版情報：言語科学. 43, pp.57-76, 2008-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

エリザベス朝における戯曲本の「人気」を検証する

太田一昭

シェイクスピアの時代において戯曲本は「たちまち売れてしまうことが見込まれる」[1]人気本であったという説がある。これは長らく多くの演劇史家に認められてきた通説であった。あった、と過去形で記したのは、現在はこれを信じる人が少ないからである。今日ではむしろ逆に、当時の戯曲本に対する需要は小さく、その出版は旨みのないビジネスであったいうのが最も有力な説である。[2] 通説の逆転現象は、1997 年に出版された一編の論文、すなわち Peter Blayney の"The Publication of Playbooks"によって引き起こされた。[3] この論文においてブレイニーは、戯曲本は「たちまち売れてしまう」人気ジャンルでは決してなく、劇の出版はマイナーな事業であったと論じたのである。ブレイニーの論文のインパクトは強烈であって、これによって従来の通説が神話として否定され、英国ルネサンス期における戯曲本の「不人気」が提唱されるにいたったのである。ところが最近、旧説を葬り去ったかに見えたブレイニーの論考に対して叛旗を翻す論文が現れた。反論によれば、戯曲本は当時、 ブレイニーの主張よりはるかに「人気」があったのである。「事実」はどうであったのか、ブレイニーが正しいのか、反論が正しいのか、あるいは両者とは別様の解釈はありえないのか――本稿は、これを検証することを目的とする。

I

戯曲出版史における地殻変動の引き金となったブレイニーの論文の内容から見てみよう。ブレイニーは、議論のたたき台として、A. W. Pollard に泉源があるとされる「神話」をとりあげる。「神話」とは次のようである。[4] (1) 劇団は通常、戯曲の出版は自分たちの利益を損なうと考えた。(2) 出版者の中には、熱心な顧客の要求にこたえようと必死になって、不正な手段を用いて劇を入手しようとする者もいた。(3) 出版登記がなされていない戯曲はおそらく、書籍商が原稿の出所を伏せておきたかった作品であろう。(4) 登記されても出版されていない場合は、書籍商がおそらく役者たちのために、劇団以外の者による海賊版の出版を防ごうとしたからであろう。このような「神話」の根底にあるのが、戯曲本に対して根強い需要があったという謬見である。ブレイニーによれば、戯曲本に対する需要は決して強いものではなかったのである。

エリザベス朝の劇団が自分たちの芝居が出版されるのを好まなかったという説の根拠は、二つである。一つは、脚本が出版されると他の劇団がその芝居を上演するかもしれないということ。他は、脚本の出版が上演に対する需要を減じるかもしれないということ。ブレイニーによれば、いずれの論拠も薄弱である。[5] 前者については、近年の研究が明らかにしているように、[6] 当時の劇団はだいたいにおいて他劇団のレパートリーを尊重していて、演目が盗まれることを恐れる必要はなかった。後者の説明が成立するには、戯曲本の市場が活況を呈していて、しかも戯曲を読んだ読者が芝居に対する興味を失って、劇場に空席ができるような状況が存在しなければならな

いが、役者たちがそのような状況を恐れていたという証拠は皆無である。

戯曲は「たちまち売れてしまう」本で決してなかったとするブレイニーの主張は、緻密な論理と実証によって組み立てられている。ブレイニーはまず、書籍市場における戯曲本の比重がいかに小さかったかを指摘する。[7] 1570年代までは戯曲本の出版点数そのものが少ない。1560年代と70年代の各10年間の出版点数は30に満たない。ブレイニーは、1580年代から劇場閉鎖の1642年までを3つの期間（1583年～1602年、1603年～1622年、1623年～1642年）に区切り、各期間の戯曲の初版発行数を調査している。それによれば、1583年～1602年の発行総数は96（年平均4.8）、1603年～1622年は115（年5.75）、1623年～1642年は160（年平均8.0）である。これは商業劇場で演じられた作品の版本数であって、仮面劇、パジェント、レーゼドラマ、大学劇は含まない。*Short-Title Catalogue* によると、同期間の出版書籍総数は1583年～1602年は年平均300弱、1603年～1622年は480弱、1623年～1642年は600強である。この数字には書籍以外の出版物やリプリントの出版点数も含まれているが、それらを差引いても戯曲本の占める割合は明らかに非常に小さい。

戯曲本は出版書籍全体に占める割合が小さかっただけでなくリプリント率も低かった、とブレイニーは指摘する。[8] 発行版数に端的に現れているように、当時の出版の中心を占めていたのは宗教書であった。例えばSternhold and Hopkins, *The Psalms in English Meter* は1583年以降の25年間に124の版を重ね、*The Book of Common Prayer* は66の版を重ねている。当時の（戯曲本を除く書籍の）版数第10位のDent, *The Plain Man's Pathway* は、1601年以降の25年間に少なくとも16の版で出版されている。（本書は16の版が現存しているが、その16版には第19版と記されている。）これに対して、戯曲本第1位は、*Mucedorus and Amadine* である。1598年以降25年間の版数は9である。第2位はMarloweの *Doctor Faustus* で、1604年以降25年間の版数は8である。以下、第3位がKidの *The Spanish Tragedy*（1592年初版、版数7）とShakespeareの *Henry IV* 第1部（1598年初版、版数7）、第5位がShakespeareの *Richard III*（1597年初版、版数5）と *Richard II*（1597年初版、版数5）である。ちなみに、Shakespeare作品のベストセラー*Venus and Adonis*（1593年初版）は版数11である。

以上からブレイニーは、一儲けするいちばん手っ取り早い方法は芝居の脚本――それを劇団はなかなか手放そうとしなかったというのが従来の通説であったが――を入手することだと考える書籍商（書籍の印刷、出版、販売を業とする者）はほとんどいなかった、と結論する。[9] 戯曲本に対しては一定の需要は存在していたが、強い需要ではなく、満足のゆく利潤を獲得することができたのは、適切な時点で適切な戯曲を入手できる幸運なあるいは才覚のある書籍商だけであった。当時は職業としての出版業は十分に確立されておらず、「出版者」の多くは書籍販売業者（bookseller）であった。[10] 印刷あるいは販売ではなく出版を主たる仕事とする書籍商も存在はしたが、その数は少なく、書籍販売業者が印刷業者（printer）に書籍の印刷を依頼するのが普通であった。印刷業者自身が書籍を出版することもあったが、書籍の多くは書籍販売業者によって出版され、そして販売された。原稿を入手した書籍販売業者が印刷業者に印刷を依頼して販売するのであるから、印刷業者自身が印刷・出版する場合より経費がかさむ。ブレイニーによれば、収支が合うには初版の約60パーセントが売れる必要があったという。一方、1583年から1642年まで

の 60 年間に出版された戯曲のうち、初版出版から 9 年以内に再版された戯曲の比率は 21 パーセントに満たない。これは、5 年内に投資の元をとれた戯曲は 5 本のうち 1 本にすぎないことを意味している。初版出版後 1 年以内に元がとれた戯曲は、20 本のうち 1 本もなかったであろう。[11] こうしてみると、戯曲の出版は財を成す近道ではなかったであろう。戯曲本が「よく売れる金のなる木」(best-selling moneyspinners) [12] でなかったとすれば、書籍商が戯曲の出版に熱心になる理由もない。大きな人気を博した少数の劇（例えば *Tamburlaine* や *The Spanish Tragedy*）を除けば、戯曲の出版は決して魅力あるものではなかった。書籍商が不法な手段を用いてでも「海賊版」を出版しようとするほどに戯曲本に対する需要があったというのは、当時の出版についての無知に由来する神話である。

II

当時の出版状況——出版者が原稿を入手するプロセス、出版許可と登記の意味、出版のコスト、出版の利潤、等々——についてのブレイニーの該博な知識と堅実な論理展開は、圧倒的な説得力をもっているように見える。英国ルネサンス期の書籍出版業においては、戯曲の出版はマージナルなビジネスであったことは疑問の余地のないように思えてくる。そういうブレイニーの説に叛旗を翻したのが、Alan B. Farmer と Zachary Lesser の共著論文"The Popularity of Playbooks Revisited" (2005)である。アラン・B・ファーマーとザカリ・レサー（以下、ファーマー - レサーと略記）は、基本的にはブレイニーの論文を高く評価している。近代初期の出版のありようについてのブレイニーの叙述は今日最も説得性のあるものであり、役者たちの承諾を得ることなく劇を出版しようとした書籍商と劇団との対立という「海賊版」神話がいかに時代錯誤的なものであるかを明らかにしている、とファーマー - レサーは言う。[13] 二人のブレイニーに対する反論は、近代初期イングランドにおいて戯曲本の書籍市場での需要は取るに足りないものであったという主張に対してである。

ファーマー - レサーは、ブレイニーの議論には根本的な欠陥があるという。というのも、ブレイニーは、戯曲本の「市場成果」(market performance) を他の書籍のそれと体系的に比較していないからである。[14] ファーマー - レサーは、ブレイニーと同じ基準——版数、市場占有率、リプリント数、利益——を用いつつ、調査範囲を拡大して他の書籍と戯曲本の比較を行い、戯曲本はブレイニーの主張よりはるかに人気があったと論じる。海賊版出版は、ブレイニーの主張するように、「神話」であるけれども、戯曲本の人気が高かったというのは「神話」でなく、事実であったというのがファーマー - レサーの反論の骨子である。

ファーマー - レサーは、人気 (popularity) の意味が問題であり、次の 4 つの基準を全体として考慮する必要があると言う。第 1、年間の出版戯曲総数。これによって、戯曲本の市場の変動がわかるが、それが戯曲本市場に特有の変動なのか、書籍市場全体の変動に対応した変動なのかはわからず、書籍市場において戯曲本がどの程度流通していたのか、つまり戯曲本の相対的な人気度は不明である。この人気の度合いを測るには、戯曲本の市場占有率という第 2 の基準を考慮しなければならない。この場合に注意しなければならないのは、ある一定の時期において何本の戯

曲の原稿が入手可能であったかという点である。というのも、戯曲本の出版点数が少ないのは、戯曲本に対する関心が小さかったことの反映ではなく、たまたま出版市場に流通する劇の原稿が少数であったことの結果かもしれないからである。また、書籍商が戯曲本に対する需要の度合いを読み誤ったために、戯曲本の出版が相対的に少なくなったかもしれない可能性も忘れてはいけない。消費需要をもっとも正確に反映するのは、第3の基準すなわち戯曲本のリプリント率である。というのも、再版が発行されるのは、その前の版が売りきれて、書籍商がその戯曲に対して継続的な需要があると判断したからである。戯曲本のリプリント率と他の書籍のリプリント率とを比較することによって、書籍購入者にとっての戯曲本の人気度についてより客観的に知ることができるだろう。第4の基準は、戯曲本の収益性である。収益性を知る手掛かりになるのは、印刷本の紙数である。戯曲本と他の書籍の紙数を調査することによって、両者の収益性を比較し、推定することができる。戯曲本の収益性が他の書籍に比べて高ければ、戯曲本が相対的に人気が高かったと推定できる。第3のリプリント率を、第4の収益性、第2の市場占有率、第1の総版数と連関させて評価することによって、戯曲本の人気の度合いを最も正確に知ることができる。[15] 以上がファーマー－レサーの基本的なスタンスである。

リプリント率で判断すれば、戯曲本はエリザベス朝・ジェイムズ朝において平均的な書籍よりはるかに売れた、説教書と比較してもたいへんよく売れた、とファーマー－レサーは言う。戯曲本は実は、近代初期の書籍商が投資することができた書籍の中で最もよく売れた部類に入るのだと二人は主張する。他の書籍よりは簡単に採算が取れたのであり、ブレイニーほかの学者たちが主張するように、その利益は些少ではなかった。チャールズ朝になると、戯曲本の出版状況は変化する。戯曲本のリプリント率は低くなるが、逆に、戯曲本の新刊出版点数は増加する。[16]

ブレイニーによれば、*STC* の1583年から1642年までの全項目の1.2パーセントから1.6パーセントが新しい戯曲本である。この数字は出版業における戯曲本の重要性を正しく反映していない、とファーマー－レサーは反論する。その理由は、ブレイニーが初版の劇作品しか計算に入れていないからである。ファーマー－レサーは、商品としての戯曲本の出版業における影響力を評価するには、リプリントを含む全ての戯曲本を考慮に入れる必要があると主張する。というのも、戯曲本の4割はリプリントであったからである。[17] ファーマー－レサーのこの批判は、正鵠を得ている。ブレイニーは、*STC* に記載された本の多くがリプリントであることは知っていたのだが、計算の手間を省くためか、リプリントの版を計算に入れずに比率を算出している。緻密なブレイニーにしては、珍しい手抜きである。

ファーマー－レサーはさらに、ブレイニーが戯曲本を *STC* の全項目と比較しているのも問題だと言う。というのも、*STC* のかなりの項目は異なる版を表すのではなく、同一の版の異刷りであるからである。加えて、多くの項目は「非投機的」な出版物（国王布告、主教巡察条項など）であることに注意しなければならない。これらの「非投機的」出版物は消費者の需要があるから印刷されるのではなく、要請によって印刷され、出版の費用は事前に支払われる。書籍商は、これらの「非投機的」出版物については、市場価値を判断して出版するのではない。こういう出版物と、需要があるかどうかを判断して出版される「投機的」な戯曲本とを比較するのは不合理である。比較は、種類の異なる出版物間で行うのではなく、同種の書籍間で行うべきである。したが

って、戯曲本の市場占有率を正確に測るには、比較の対象として不適切な「非投機的」出版物と異刷りとを除外する必要がある、とファーマー・レサーは主張する。[18] 二人は、1590 年、1600 年、1610 年、1620 年、1630 年、1635 年についてサンプル調査を行い、この 6 年の *STC* の見出し項目 3130 のうち、異刷りが 8 パーセント強、「非投機的」出版物が約 13 パーセントを占めていたとし、「投機的」書籍は約 79 パーセントであったとしている。ファーマー・レサーは、この数値を用いて 1590 年から 1640 年まで各年の戯曲本の市場占有率を算出している。このようにして算出された市場占有率は必然的に、ブレイニーの数値より高くなる。時期により変動が大きいが、例えば 1629 年から 1640 年までに出版された「投機的」出版物の約 3.4 パーセントは戯曲本であった。最も多い年においては、6.2 パーセント（16 冊の「投機的」書籍のうち 1 冊）強が戯曲本であった。戯曲本はたしかに群を抜く市場占有率ではなかったが、決してマージナルな出版物ではなかった、とファーマー・レサーは力説する。[19]

ファーマー・レサーはさらに、戯曲本の相対的な市場占有率を考察する際には、出版の特許を得た一部の書籍商によって「独占的」に刊行される出版物も除外すべきだと言う。「独占的」な出版物とは、例えば暦、聖書、教理問答書、教科書である。これらは、戯曲本などの「投機的」書籍よりも発行部数がはるかに多かった。「投機的」な書籍の発行部数は書籍商組合の規定により制限されていて最大で 1250 から 1500 部であったが、暦は年間におそらく何万という部数が発行された。時代は少し下がるが、1660 年代における暦の年間発行総数は 40 万部にものぼったという。これらの出版物は大きな利潤が確実に見込めるものであったから、書籍商はまずこれらの独占的出版権を得ようとした。こういう「独占的」出版物は、全出版物の約 11 パーセントを占めていた。書籍市場における戯曲本の比較調査をする際にこれらの「独占的」出版物を除外すべきだとファーマー・レサーが考える理由は、出版リスクの小さい（大きな需要が見込まれ、需要予測をすることなく刊行できる）「独占的」出版物とリスクの大きい（出版投資をするにあたって、需要予測をしなければならない）「非独占的」書籍とを十把一絡げにすると、「非独占的」書籍に対する需要を書籍商がどのように評価していたかが見えにくくなるからである。聖書や暦のような「独占的」出版物の刊行の機会は通常は閉ざされていたから、そのような出版物と戯曲本とを比較するのは不合理である。戯曲本という「非独占的」かつ「投機的」書籍の市場価値を評価するには、出版するかしないかの選択が書籍商に任されていた、他の「非独占的」・「投機的」書籍と比較する必要がある、とファーマー・レサーは言う。このように「非独占的」・「投機的」書籍市場という同じ土俵で戯曲本の市場を調査することによって、戯曲本が投資対象として書籍商にとってどれほど魅力的であったかがわかるのである。当然のことながら、「独占的」出版物を除いた「合理的な最も狭い意味での市場」[20]においては、戯曲本の市場占有率は高くなる。戯曲本需要の第 1 拡大期（1590-97 年）は 5.8 パーセント、第 2 拡大期（1598〜1613 年）は 5 パーセントが戯曲本である。最も多い年には、約 11 冊に 1 冊が戯曲本である。こうしてみると、戯曲本は、ブレイニーその他の学者たちが考えるよりはるかに広く流布していた、とファーマー・レサーは主張する。[21]

市場占有率は、戯曲本の人気度を示す決定的な指標ではない。ファーマー・レサーが人気度を測る決め手とみなすのは、戯曲本のリプリント（再版・重版）率である。[22] ブレイニーによれば、1583 年から 1602 年までに出版された（職業劇団の）戯曲 96 本のうち、25 年以内に再版されたの

は46本（48パーセント）である。1603年から1622年までの20年間に、リプリント率は50パーセント強に上昇する。この数字そのものは正確だが、人気というのは相対的な概念であって、戯曲の絶対的リプリント率だけでは人気度はわからない。他の書籍と比較することによってはじめて、戯曲本の人気があったのかなかったのかを知ることができる。そこでファーマー・レサーは、戯曲本初版のリプリント率を他の2種類の出版物初版のリプリント率と比較する。2種類の出版物とは、*STC*に記載された（戯曲本以外の）全ての（独占的、非独占的出版物の両方を含む）「投機的」出版物と英語の説教書である。ファーマー・レサーによれば、1576年から1625年までの50年間に戯曲本は「どんどん売れた」（sold like hot cakes）[23]のである。というのも、他の「投機的」出版物の2倍以上リプリントされているからである（戯曲本の再版率39.9パーセントに対して「投機的」出版物の再版率は18.1パーセント）。少なくともこの50年間については、戯曲本は成功しなかったとか不人気の出版物であったという見解に与することはできない。最もよく売れたとされる英語の説教書と比較してさえ、けっして引けはとらない。たしかに市場占有率で判断すれば、説教書は戯曲本より人気があったように見える。ピーク時（1606〜1640年）の説教書の版数は年平均42強（「投機的」市場占有率は9.8パーセント、「非独占的・投機的」市場占有率は11.4パーセント）で、ピーク時の戯曲本の市場占有率の2倍以上である。しかしリプリント率で評価すれば、その人気度は戯曲本より小さい。1576年から1625年までに初版が出版された説教書の20年以内の再版率は、19.3パーセントである。リプリントのピーク時（1591〜1606年）の再版率でも、29.9パーセントである。これに対して戯曲本の1625年までの再版率は常に、宗教書ベストセラーより2倍以上高い。

この時代の戯曲本ベストセラーであった*Mucedorus*は、1642年までに15版が出版されている。他方Arthur Dentの*Sermon of Repentance*は、少なくとも39版が出版されている。この数字から判断すると戯曲本は説教書ほど売れていないように見えるかもしれいないが、1576年から1625年までに初版が出版された戯曲本と説教書について、その（1660年までの）リプリント率を版ごとに（第2版から第9版までの各版及び第10版以上に分けて）調べてみると、いずれの版においても戯曲本のリプリント率が説教書を凌いでいる。チャールズ朝以降戯曲本のリプリント率は低くなるが、それでも、1660年までに第3版が出版された戯曲本と説教書の比率を比較すると、戯曲本（26.1パーセント）が説教書（20パーセント）を凌いでいる。

ファーマー・レサーによれば、1576年から1625年までに初版が出版された戯曲本の5年以内のリプリント率は、20.2パーセントである。これは、*STC*に記載された他の「投機的」出版物の20年内リプリント率18.1パーセントを上回る。戯曲本の20年内リプリント率は39.9パーセントであるが、初版発行から20年を超えてリプリントされる作品まで含めれば、その数字は48.6パーセントにまで跳ね上がる。上記期間内に初版が発行された職業劇団の作品のほぼ半分が、1660年までに少なくとも第2版が出版されている。非独占的・非投機的出版物で、戯曲本ほど版を重ねているものはない。戯曲本は他の書籍よりすばやく投資を回収できただけでなく、はるかに長期間にわたって利潤を生んだ——ファーマー・レサーはこう主張する。

戯曲がよく売れる本であり、投資対象として魅力があったのであれば、もっと多くの戯曲本が出版されてもよかったのではないか。戯曲本の市場占有率は従来考えられていたよりかなり大き

かったとはいえ、1589年から1625年までに出版された新作戯曲は221本、年平均約6本である。大方の学者は、これを全く低い数字とみなしているようだ、とファーマー－レサーは言う。ブレイニーによれば、書籍商がもっと多くの戯曲本を出版しなかったのは利幅（戯曲1本あたり6、7ポンド）が小さかったからだという。これに対してファーマー－レサーは、出版者が利幅の小さい戯曲本の出版を嫌ったという証拠はないと反論する。また、1回の出版で得られる利益が小さいからといって投資対象としての魅力が比較的乏しいということには必ずしもならないだろう。というのも、特に戯曲本は、他の大多数の書籍よりはるかに確実に利益を生んだと思われるからである。バラッドの出版の利幅は戯曲本より小さかったけれども、戯曲本よりはるかに多く出版されたのである。[24]

版本の長さを印刷に使われた全紙の枚数（シート）で表すと、ファーマー－レサーによれば、職業劇団の戯曲本の長さの「中間値」は9.5シートである。1609年から1611年までに出版された「投機的」出版物1016点のうち、ファーマー－レサーが印刷紙枚数を確認できた987点の「平均」の長さは30シートを少し超える。これは戯曲本の「中間値」9.5シートよりはるかに長い。しかし「平均値」は、少数の極端に長い書籍、例えばFoxeの*Acts and Monuments*のような書籍によって押し上げられた数字であることに注意する必要がある、と二人は主張する。このような大部の書籍は、書籍商が通常出版する書籍の長さを正確に表さない。問題にすべきは、長さの「平均値」ではなく「中間値」である。上記987点の「中間値」は、10.5シートである。ということは、1609年から1611年までに出版された出版物の中で、半数強が典型的な戯曲本より長く、半数弱が短いということになる。[25]

戯曲本が当時の出版物の中でほぼ典型的な長さであったということは、（価格も利幅も利潤も普通であっても、他の書籍よりはるかに売れたであろうから）書籍商は戯曲を魅力的な投資対象とみなしたにちがいないということである。戯曲本は、ブレイニーその他の研究者が近年主張しているように、低コスト、低利潤、比較的高リスクの出版物ではなく、中コスト、中利潤、比較的低リスクの出版物であり、投資者にとっては魅力的であったはずだ、とファーマー－レサーは指摘する。[26]

戯曲本が投資対象として魅力的であったとすれば、なぜ出版点数が少ないのであろうか。高いリプリント率と魅力的な利益構造から判断すれば、戯曲本に対する需要が少なかったからとは言えない。ファーマー－レサーによれば、出版戯曲数が少ないのは脚本の供給が少なかったからである。脚本の供給が少なかったのは、劇団が劇の出版を制限したからではない。このような劇団の「保護主義」説は、当時の劇団は他のライバル劇団による盗用を恐れていたとか、あるいは脚本が出版されると劇場で観劇料を払って芝居を観る客が減るのではないかと心配したという「神話」に由来する。近年、この「神話」は近年ブレイニーらによって説得的に論破されている。脚本の供給が少なかったのは実は、説教書やバラッドなどの出版物より職業劇団の制作する戯曲の数が少なかったからである、とファーマー－レサーは主張する。簡単に言えば、書籍商の入手できる脚本の絶対数が少なかったのである。書籍商は脚本を入手さえすれば出版ができたが、劇団が1本の劇を上演するには、脚本代以外にもかなりの投資をせねばならず、年間に上演できる戯曲の本数にはおのずと限界があったのである。[27]

説教書は、投機的書籍市場において、戯曲本よりはるかに大きな市場占有率であった。一方戯曲本の再版が出版される可能性は、はるかに大きかった。では、この 2 種類の書籍のうち、どちらがより人気があったのか。結局、両者とも他の出版物より人気があったのだが、人気度を測る基準が異なるのである、とファーマー - レサーは言う。両者は、「人気の構造」が異なるのである。[28]

ファーマー - レサーによれば、チャールズ朝イングランドでは、戯曲本の「人気の構造」が急速に変化したという。初版が再版される率が落ちたのである。1626 年から 1640 年までに初版が出版された戯曲 122 本のうち、20 年以内に再版されたのはわずかに 11 本(9 パーセント)である。この再版率は、チャールズ朝以前の率の 4 分の 1 に満たない。投機的書籍全体の再版率の半分である。これは戯曲本の人気度がチャールズ朝では下がったと考えるべきであろうか。書籍商の投資意欲を人気度の判断基準とすればそうではない、とファーマー - レサーは言う。戯曲本の総出版数(初版及び第 2 版以降のリプリントの数)は、1629 年から 1640 年までの期間に頂点に達する。その前の 15 年間と比較すると、3 倍近い出版点数である。加えて、この期間に戯曲本の書籍市場占有率も急速に上昇し、前の 15 年間の 2 倍に達している。つまり、年間の出版数と市場占有率に基づけば、以前と同じく戯曲本は人気があったのである。チャールズ朝の人々の新作戯曲本に対する購買欲は高かったが、リプリントを求めることは少なかった。再発行された戯曲本は、主としてエリザベス朝・ジェイムズ朝の「古典」であった。このように、1630 年代における戯曲本に対する「人気の構造」はそれまでとはかなり異なっていたが、戯曲本は全体としてみれば近代初期の出版業の中で大きな成功を収めたジャンルであった。特にエリザベス朝・ジェイムズ朝においては、投機的書籍全体あるいは説教書と比較しても、2 倍以上のリプリント率であった。どの出版物が顧客に人気があるかを書籍商たちが知っていたとすれば、彼らは低いリスクで応分の利益が得られる戯曲を入手・出版することに熱心であったに違いない、とファーマー - レサーは結論する。[29]

III

ファーマー - レサーの主張に対するブレイニーの反論"The Alleged Popularity of Playbooks"が、*Shakespeare Quarterly* の同号に二人の共著論文と併載されている。先に述べたように、ブレイニーは、1583 年から 1642 年までを 20 年ごとに 3 つの期間に区分して、各 20 年間の新作戯曲出版数を、96、115、160 としていた。*STC* の索引に記載された出版物総数を分母として新作戯曲本の比率を算出すると、1.6 パーセント、1.2 パーセント、1.3 パーセントである。*STC* にはありとあらゆる出版物の情報が記載されており、出版物の種類や誤記や重複を無視した統計処理は不合理だというのが、ファーマー - レサーの批判の一つであった。これについては、ブレイニーはファーマー - レサーの指摘の正しさを認めて、この数字は戯曲本の出版が出版業においてごくわずかの比重しか占めないことを示すためのものであって、戯曲本の市場占有率を正確に表すものではなかったと述べている。ファーマー - レサーの指摘に従って数値を修正すると、分母とすべき出版物の総数は多少(ファーマー - レサーの計算では 8 パーセント、ブレイニーによれば 8.5 パーセン

ト）少なくなり、戯曲本の比率はそれだけ大きくなる。[30]

このようにブレイニーは、ファーマー－レサーの共著論文を、少なくとも部分的には評価している。しかし、ファーマー－レサーの論考は全体として、議論の細部においても論点の立証方法においても問題があるとブレイニーはみなす。例えば、二人は統計的な数値を自分たちの仮説に適合するように恣意的に操作している、と批判する。ブレイニーは、1583 年から 1640 年までの期間について戯曲本の出版が多い年も少ない年も等しく考慮にいれて平均値を算出し、戯曲本の比率は 2.86 パーセントとしているが、ファーマー－レサーは、（第 1 のピーク時には 24 点の書籍のうち 1 点が戯曲本であり、また別のピーク時には 16 点の書籍のうち 1 点が戯曲本であった、というふうに）ピーク時の戯曲本の比率を引き合いに出して、実際以上に戯曲本の人気が高かったかのような印象を与えようとしている。しかも、「戯曲本はたしかに最も重要な出版物ではなかったが、周辺的なものでは決してなかった」という統計の要約も粗雑であり不適切である。ファーマー－レサーは「戯曲本はブレイニーの主張よりはるかに人気があった」ことを証明しなければならないはずだが、ブレイニーによれば、ファーマー－レサーの仮説に都合のよい数値に依拠してもそのような結論は導き出せないのである。[31]

ファーマー－レサーは、戯曲本の出版市場における占有率を算出するときに比較の対象とすべきではない出版物を分母となる出版物の総数から除いている。ブレイニーは、除外されるべき書籍の選び方が不適切だと考える。特に、特許によって独占的に出版される書籍を除いているのが問題である。[32] ファーマー－レサーによれば、独占的に出版される書籍は、独占出版権をもつ書籍商以外は最初から出版の道が閉ざされていたのであるから、投資対象として検討されることはなかったのである。これに対してブレイニーは、戯曲本の市場占有率を問題にするのであれば、書籍商に出版の選択権があるかどうかではなく、現実に消費者が購入する出版物の中でどれだけの比率を占めていたかが重要である、と言う。書籍市場で購入できる本であれば、独占的出版物であろうとなかろうと区別する理由はないのである。加えて、特許権者によって独占的に出版される書籍と他の書籍は、ファーマー－レサーが主張するほどに「異なる経済的な条件」のもとで出版されてはいないのである。[33]「韻文訳詩篇」として知られる *The Whole Booke of Psalmes* は、エドワード六世時代及び 1560～1561 年に John Day ほか複数の書籍商によって不完全なコレクションで出版されていたが、1562 年に Day が残りの詩篇の翻訳を入手して 1560 年版の補遺と出版し、その際に新しい翻訳詩篇を書籍商組合登記簿に登録した。この Day は 1559 年に、以後 7 年間彼が出版する全ての書籍を独占的に出版することを保証する特許状を獲得していた。こうして Day は、「韻文訳詩篇」について、（登記と特許という）二重の独占的出版権を得たのである。特許権は息子の Richard Day に引き継がれて、最終的には書籍商組合の所有となるのであるが、ファーマー－レサーの計算では、この「韻文訳詩篇」は独占的に出版された本として書籍市場から除外されるのである。[34] しかし、仮に Day が特許による独占的出版権を得ていなかったとしても、同じように Day の本として出版され、そして同じように売れていただろう。というのも、「韻文訳詩篇」は書籍商組合登記簿に登記されており、Day のみが独占的に出版できる書籍であることに変わりはなかったからである。要するに、独占的出版物と他の本を区別することの意味をブレイニーは認めないのである。[35] ちなみに、「韻文訳詩篇」は 1598 年までの版が 121 現存している。

戯曲本のベストセラーである*Mucedorus*は、1598から1639年までに15版が出版されている。同期間に印刷された「韻文訳詩篇」は、368の版が現存している。当時最もよく売れた書籍のいくつかは、「韻文訳詩篇」のように特許によって独占的に出版された本であったが、書籍の「人気度」を測る際にこれらの書籍を考慮しないのは見当違いもはなはだしい、とブレイニーは言う。[36] ファーマー－レサーは、独占的書籍のほかに、英語以外の言語で書かれた書物やロンドン以外で出版された本も計算から除外している。このように「書籍市場」を狭めることによって、戯曲本の相対的比率は大きくなるが、それでも戯曲本が、ファーマー－レサーが主張するレベルの人気があったことの証明には成功していない、とブレイニーは批判する。[37]

出版物の人気度を測る指標としてリプリント率を重視するファーマー－レサーは、1576年から1625年までに初版が出版された3つのカテゴリーの書籍について、初版刊行以後5年内、6〜10年内、11〜20年内のリプリント率を比較している。3つのカテゴリーとは、戯曲本、投機的書籍（戯曲本を除く）、説教書である。ファーマー－レサーによると、投機的書籍と説教書のリプリント率はほとんど同じであるが、戯曲本の20年内のリプリント率は約40パーセントで、投機的書籍（18.1パーセント）あるいは説教書（19.3パーセント）の約2倍である。[38]（戯曲本と説教書については、1576年から1625までに出版された初版の全数調査。投機的書籍については、論者が抽出した6年のサンプル調査。）これに対してブレイニーは、1583年から1640年までに出版された全ての戯曲本と説教書を数えて、ファーマー－レサーの調査と大差ない結果を導き出している（戯曲本リプリント率32.5パーセント、説教書17.5パーセント）。[39] ブレイニーが問題とするのは、リプリント率の差があたかも人気度を直接反映するかのようにファーマー－レサーが論じている点である。ブレイニーは、リプリント率を人気を測る指標とするのではなく、市場に出回っている書籍の総数こそ問題にすべきだと言う。というのも、戯曲本と説教書とでは、出版点数が大きく異なるからである。1583年から1640年までに出版された戯曲本の版数は、597である。一方同期間の説教書の版数は、1851である。戯曲本は年平均10.3であり、説教書は31.9である。同期間内に販売目的で印刷された書籍に占める割合は、戯曲本は2.87パーセント、説教書は8.9パーセントである。この数字に基づけば、説教書は戯曲本の3倍以上売れたのである。[40]

ファーマー－レサーは、コレクションとして出版されることが戯曲本よりはるかに多かった点を指摘している。しかし、書籍の人気度を測る際にその意味を十分に考察していない。ブレイニーによれば、1583年から1640年までに出版された戯曲本のうち2編以上の作品を納める戯曲集は、わずかに26である。11以上の作品を収めるコレクションは、わずかに2である。すなわち、36の作品を収めるシェイクスピアの二つ折本2つである。これに対して、説教集は626である。（これは同期間に出版された戯曲本の総数597を超える。）この中で190は2編の説教から成るコレクションであるが、19が50編以上の説教を収めている。コレクションに収められた個々のテクストの数を計算に入れれば、上記期間内に出版された戯曲は719本であり、説教は6852編である。いずれのジャンルの書籍が人気度が高かったはおのずと明らかであるが、にもかかわらず、ファーマー－レサーはリプリント率を尺度として人気度を測ろうとする。ブレイニーによれば、「量」を考慮せずに「率」を比較すると「ばかげた結論」にいたることがあるのだ、とファーマー－レサーを批判する。[41]

ブレイニーは、「多くの書籍商が戯曲本を魅力的な投資だとみなしたにちがいない」という主張にも疑義を唱える。ブレイニーによれば、1583 年から 1642 年までに、少なくとも 785 名が書籍の出版あるいは販売に携わっていた。このうち 151 名（19.2 パーセント）が単独あるいは共同で戯曲の出版あるいは（おそらく出版投資に多少の出資をして）卸売りを行った。かれらは全部で 332 本の新作戯曲を出版しているが、そのうち 155 本（46.7 パーセント）は 1700 年までにリプリントされている。初版出版から 25 年以内に再版されたのは、わずかに 119 本（35.8 パーセント）である。初版出版者の存命中に出版されたのは 107 本（32.2 パーセント）にすぎない。あるいは 103 本（31.3 パーセント）だったかもしれない。3 本の戯曲のうち 1 本しか初版出版者に比較的利潤の大きいリプリント発行の投資のチャンスはなかったのである。上記 151 名の書籍商のうち 84 名（55.6 パーセント）は、一度も再版することなく世を去った。[42] たしかに少数の戯曲は大きな人気を博した。例えば *Mucedorus*、*Doctor Faustus*、*The Spanish Tragedy*、*1 Henry IV* はベストセラーだと言ってさしつかえない。しかしだからといって、もっと標準的な戯曲本が有力な投資対象であったわけではない。他のジャンルの書籍で、*Mucedorus* より売れた本 40 冊あるいは 50 冊のリストを作成するのは容易である。以上のような統計値を無視して、書籍商たちが戯曲本を魅力的な投資対象とみなしていたにちがいないとは言えない。結局、ファーマー - レサーの論考を読んでも、近代初期英国の印刷者、出版者、書籍販売業者、読者にとって、戯曲が比較的重要ではなかったという見解は少しも変わらなかった、とブレイニーは言う。[43]

ブレイニーは、論文の末尾に、1583 年から 1642 年までに出版された戯曲本に関する貴重な表を掲載している。[44] それによると、この 60 年間に出版された（リプリントを含む）戯曲本の総版数は 606 である。年平均、10.6 冊の戯曲本のうち新作戯曲は 6.17 本である。書籍市場全体（書籍商が販売した本の総数）に占める戯曲本の割合は、2.77 パーセントである。これを大きいと見るか小さいと見るかは意見が分かれだろうが、この数字は推測によらない、戯曲本の市場占有率に近い、とブレイニーは言う。[45] 近代初期の読者は、シェイクスピアの四つ折本よりも宗教書を求めたのである。書籍市場における宗教書（聖書、祈祷書、説教書、詩篇書、教理問答書、等々）の圧倒的シェアは紛れもない。書店の客は、戯曲本や他の「文学的」な書籍よりも、宗教書にはるかに多くの金を使ったのである。宗教書が近代初期の読者にとっていかに重要であったかを理解せずして、（我々が近代初期の読者よりはるかに評価する）劇文学の背景を十分に理解することはできない、とブレイニーは反論を締めくくっている。[46]

Ⅳ

ブレイニーによるファーマー - レサーの共著論文批判は手厳しいものであったが、これで論争の決着がついたのではない。ファーマー - レサーは、*Shakespeare Quarterly* の次号（vol. 56, no. 2, 2005: 206-213）に、"Structures of Popularity in the Early Modern Book Trade" と題する論考を寄せて、ブレイニーに再反論を試みている。ファーマー - レサーは、近代初期の書籍市場に関する統計値についてはブレイニーのそれと大差ないので、争点はデータの解釈方法だと考える。ファーマー - レサーが特に問題とするのは、書籍の人気度を測る際に市場占有率とリプリント率の関係をど

のように解釈するかという点である。ファーマー－レサーは、リプリント率を重視する。リプリント率は、「書店で販売されている戯曲本を客がどれだけ熱心に買いたいと思ったか？ 戯曲本は有望な出版投資であったか？ 戯曲本は確実に利益があがったか？」といった問いに答える最良の基準だと言う。[47] ファーマー－レサーによれば、リプリント率の高い戯曲本は他の投機的書籍より出版のリスクがはるかに小さかったのであり、リスクが小さいということは、とりもなおさず客の間で戯曲本の人気があったということである。ブレイニーは、リプリント率が示す人気を軽視している。ブレイニーにとっては、再版の率ではなく、版数の多寡が人気を測る尺度である。すなわち、版数が多いほど人気の高い出版物である。同様の母数の比率を比較すのであれば全く合理的であるが、説教書と戯曲本は出版された版の総数が異なるのであるから両者のリプリント率を比較するのは無意味である。これに対するファーマー－レサーの反論は、いささか苦しい。二人によれば、種類の異なる出版物の版の総数が、リプリント率を文句なしに比較できるほどに「同程度」であることを知るのはむずかしく、また二種類の書籍の総版数とリプリント率が異なるのは避けられないであろう。したがって、必要なのは総版数が「同程度」であるかどうかを主観的に判断するのではなく、異なる種類の書籍のリプリント率を、総版数との関係において健全な方法で評価することだという。[48] ファーマー－レサーのこの主張は、残念ながら、ブレイニーの反証になりえていない。総版数が近いものでなければ比較できないというのは実は、ブレイニーの趣旨ではない。ブレイニーは、ファーマー－レサーが出版市場に流通している総版数の大きな差異を実質的に無視して、二つの異なるジャンルの出版物のリプリント率を戯曲本の人気の指標としていることが問題だと指摘しているのである。ファーマー－レサーは、例えばシェイクスピアの作品とエドワード・シャーパム（Edward Sharpham）の作品を比較する場合は母数が少なく、しかも両者の現存の作品数に大きな隔たりがあるから、リプリント率は統計学的に重要な意味はもちえないが、近代初期の戯曲本と説教書は母数が大きく、リプリント率はそれぞれのジャンルの相対的市場成果の真の差異を示している、と主張する。[49] このファーマー－レサーの主張も、ブレイニーの趣旨の曲解であるように思える。ブレイニーは、リプリント率が無意味だとは言っていない。戯曲本と説教書は市場占有率（発行部数）があまりに違うので、リプリント率に加えて、市場に流通している総版数を――さらにはコレクションという形態での出版の多寡までも――考慮に入れる必要があると述べているのである。

もっとも、ファーマー－レサーは、市場占有率は重要ではないとか見当違いだと主張しているのではない。二人によれば、市場占有率は「どの本が出版業全体において最も流通していたか？ どの種類の本が最大数の小売取引に参与したか？ どの種類の本に出版者たちは最大の資本を投じ、そして経済的な利益を得たか？」といった問いに答えるには最適である。[50] これも「人気」にかかわる重要な問いであるが、ブレイニーの最大の関心をひくのはこの問題である、と言う。例えばブレイニーは宗教書の市場占有率が戯曲本よりはるかに大きかったこと、近代初期の書店の客は戯曲本より宗教書の購入にはるかに多くの金を使ったことを指摘している。このようなブレイニーの主張に反対する理由はなにもない、とファーマー－レサーは言う。市場占有率もリプリント率も「人気」の全体を語ることはできない。戯曲本と説教書とでは「人気の構造」が異なっていて、それぞれの比率が表す「人気」は種類が異なるのだとファーマー－レサーは示唆する。[51] し

かし、この論理展開も歯切れが悪い。議論の最後になって、「異なる人気の構造」という、逃げ口上のような恣意的な概念を導入しても説得性はない。ファーマー－レサーは、このテーマの最初の論考"The Popularity of Playbooks Revisited"の出発点で、「戯曲本はブレイニーの主張よりはるかに人気があった」と書いている。[52] ならば、ブレイニーが問題にしている（とファーマー－レサーが考える）「人気の構造」について反論すべきである。しかし、説得性のある反論はむずかしいだろう、と筆者は思う。ブレイニーは、市場占有率からリプリント率など出版にかかわる諸条件をトータルに判断して、戯曲本の人気度が相対的に低かったとしている。ファーマー－レサーは、諸条件を統合的に評価することの重要性を標榜するが、それを十分に実践することをせず、リプリント率に過度に依存した議論に陥っている。ファーマー－レサーが最後に、説教書と戯曲本はどちらが人気があったのかという問いを発しながら、これに対する明確な解答を回避して、説教書も戯曲本も他の種類の書籍より人気があったようだと曖昧に結論し、さらに「人気の構造」のダブルスタンダード（と筆者は思う）を持ち出しているのは、自分たちの仮説の立証が不十分であることを認めているようなものである。

ファーマー－レサーがブレイニーの「市場」概念に異を唱えているのも、苦しい反証のように思われる。二人は、唯一の「市場」というものは存在せず、異なる定義の市場が存在するだけであると言う。学者の調査目的によって、市場の定義は異なってしかるべきだと考える。[53] ブレイニーが好むのは、市場の「最も広い合理的な定義」である。ファーマー－レサーが考察の対象としているのは、この「広い」書籍市場だけはない。二人は自分たちの仮説を立証するために「最も狭い合理的な定義」の市場も検討する。この「狭い」定義の書籍市場は、ロンドンで非独占的に出版された英語の本からのみ成る。ファーマー－レサーが「狭い」定義の市場を重視するのは、この市場の本が戯曲本と重要な特徴を共有していると考えるからである。複数の書籍市場の定義があるというファーマー－レサーの主張も、しかしながら、ブレイニーの疑問に正面から答えていない。ブレイニーは、ファーマー－レサーが独占的に出版された書籍や英語以外の本を市場から除外することが問題だと指摘しているのである。除外するのであれば、その説得的理由を提示すべきであるが、それができていないために、「最も狭い合理的な定義」の導入は、戯曲本の相対的比率をかさ上げするための恣意的な操作にみえてしまうのである。

上に述べたように、ブレイニーはファーマー－レサーへの反論"The Alleged Popularity of Playbooks" (2005)において、1583年から1642年までの60年間に出版された（リプリントを含む）戯曲本の総版数は606、書籍市場全体に占める割合は2.77パーセントとしている。この数字は、ブレイニーが1997年の論文"The Publication of Playbooks"で提示した戯曲本初版の比率の約2倍である。ブレイニーは、この数字を大きいとみるかは見解の分かれるところだと言うが、筆者にはかなり大きな数字だと思われる。"The Alleged Popularity of Playbooks"の末尾の表は、上記60年間を10年ごとに区切り、各10年間の数値も掲載している。それによると、最も多かった1593～1602年と1603～1612年の戯曲の市場占有率はそれぞれ4.18パーセントと3.99パーセントである。当時の書店で販売されていた本25冊のうち1冊が戯曲本だったのである。宗教書が圧倒的シェアを誇っていた時代に、これは驚くべき数字であろう。筆者は、ファーマー－レサーの戯曲本市場占有率の算出方法には賛同できないものの、ブレイニーに戯曲本の市場占有率の再検討を促し、上

記のデータをブレイニーから引き出したのはファーマー－レサーの功績であると思う。また、戯曲本のリプリント率が他の書籍一般よりかなり高い点を「発見」したのもファーマー－レサーの論考が評価されてしかるべき点である。ブレイニーが1997年の論考で、*STC*の記載項目に多くのリプリントが含まれているのは知っていながら、初版とリプリントの両方を含む総版数を分母として戯曲本初版の比率を算出したのは、戯曲本のリプリント率を過少に見積もっていたからかもしれない。

ファーマー－レサーは再反論の中で、市場占有率は需要だけでなく供給によってもまた影響されるという点をふたたび力説している。二人によれば、戯曲本の市場占有率が説教書より低い理由の一つは、台本の数が説教書より少なかったからである。もし劇団が説教書と同じ数の芝居を上演していたならば、もっと多くの戯曲本が出版されていただろう。このような供給と需要の基本的な問題を無視するのは、ナイーブである。それゆえ、供給と需要の複雑な関係を理解した上で書籍の人気について調査しようと思えば、発行版数の総計と市場占有率だけではなく、商品として売りに出されてからの市場成果（リプリント率と収益性）を調べる必要がある、とファーマー－レサーは説くのである。[54]

ファーマー－レサーは、再反論を締めくくるにあたって、「人気の構造」を再度持ち出し、出版物によって人気の尺度は異なってしかるべきだと主張する。例えばニュースブックは再版されなかったし、1部の長さは2〜3シートで利益も小さかった。しかし発行版数と市場占有率は、戯曲より説教書のそれにずっと近い。となれば、ニュースブックの人気度を測る際には、リプリント率以外の指標を用いなければならない。この例が示すように、リプリント率は低くても需要が多い出版物もあったのであるが、同様に、一部あたりの利益は小さくても需要が多い出版物もあったし、市場占有率が低くても需要の多い本もあったであろう。このような理由から、説教書と戯曲本のどちらか一方が他方より絶対的な意味で人気があったという指摘はしないように注意したのだ、とファーマー－レサーは言う。説教書は、リプリント率は書籍市場において平均的であったが十分な供給があり大量生産された出版物であった。戯曲本は、リプリント率は高かったが出版者にとっても顧客にとっても供給が不足していた。「人気の構造」概念を用いてリプリント率に着目すれば、戯曲本は、1997年のブレイニーの新説以来の一般的な理解とは逆に、書籍購買者に人気があり、書店ですばやく売れたのである。[55]

ファーマー－レサーは、「人気の構造」概念を、これこそ自分たちの論文で売りであるかのごとく力説するが、筆者には最後まで、我田引水的な議論であるように思えてしかたがなかった。複数の市場の定義がありうるように複数の人気の構造がありうるという主張は、つまるところ、人気の度合いを測るために最も適切な基準はなにかについての判断の放棄ではないかと思う。またリプリント率を重視するファーマー－レサーの解釈法は、プロ野球の強打者を決めるのに、ホームラン率だけに依拠するようなものである。例えば打者Aは400打数で40本のホームランを打っているとする。打者Bは100の打数で15本のホームランを打っているとする。両者とも年間を通じてベンチ入りしていて、ケガなどによる欠場はなかったものとする。どちらがより強力な打者と言えるか。ファーマー－レサーの判断基準によれば、打者Bがより強力な打者となりかねないのである。打者Bのホームラン率は打者Aの1.5倍であるからである。ファーマー－レサー風

に言えば、打者Aのホームランの総数は多いけれども、打者Bの打数は少なく、ホームランの総数が少なくなるのは当然である。もし打者Bの打数がもっと多ければ、ホームランの数は多くなっていたであろう。したがって、この場合、問題にすべきはホームランの総数ではなく、ホームランを打てる率である。ゆえに、ホームラン率に基づけば、打者Bは打者Aよりはるかに強力なバッターである。野球に少し詳しい人であれば、この理屈に賛同する人はいないであろう。誰が強打者かを決めるには、打席数や打率など、他のデータを合わせて総合的に評価しなければならない。もし打者Aの打席数が600であり、打者Bのそれが110であれば、打者Aが文句なしにより強力な打者ということになるであろう。打者Bの打席数が少ないということは出場機会に恵まれなかったということであり、出場機会が少ないということは、それだけ（例えば左ピッチャーが打てないとか、打率が低すぎるといった理由で）打者としての評価が低いということになるであろう。打者Aの打席数と打数の差が200というのは、打者Aが多数の四死球を得ていること、すなわち打者Aが強打者であることを示唆する。リプリント率のみに基づいて、戯曲本の人気度を判断するのは、ホームラン率のみに基づいて誰が強打者であるかを決めることに等しいのである。参照する基準によって「人気」は異なりうるというのは不合理であって、しかるべき総合的な判断基準によって判断すべきなのである。ファーマー・レサーが拘泥するリプリント率は判断の際に考慮に入れるべき重要な指標であるが、それだけで「人気」を云々しても説得性はないのである。

ファーマー・レサーは、戯曲本の版数が説教書に比べて少ないのは、脚本そのものの数が少なく、書籍市場への参入の機会が限られていたからだと主張する。このような見方は正しいだろうか。Alfred Harbageの*Annals of English Drama*（1989）によれば、1576年から1642年の劇場閉鎖時までに創作された劇作品は少なくともおよそ1200である。このうち刊本として現存しているのが469作品（計961版）である。[56] *Annals*に記載された全作品のうち少なくとも39パーセントが戯曲本として印刷されたのである。逆に言えば、約6割の劇は印刷されなかったのである。*Annals*は、上記期間に創作されたすべての劇作品名を記しているのではない。さまざまな資料からタイトルが確認できたものだけしか記されていない。*Annals*にはレーゼドラマや仮面劇のように劇場で上演されなかった作品も含まれているが、逆に、上演された劇を網羅しているわけではない。刊本はおろか上演された記録を全くとどめない作品も多数存在するのであって、実際に上演された芝居の数は、*Annals*に掲げられたものよりかなり多かっただろうと推測される。最も多くの上演の記録が残っているのは、海軍大臣一座の作品である。これはもちろん、ヘンズロウが「日記」に多数の上演関係の情報を記録しているからである。例えば*Annals*（1964）の1598年の項には職業劇団によって創作初演されたと推定される37の作品名が記されているが、そのうち34は海軍大臣一座の演目である。海軍大臣一座のライバル劇団の宮内大臣一座の演目数は3（または2）である。1599年は41作品中海軍大臣一座の演目数は29であり、宮内大臣一座は6である。1600年は31作品中21が海軍大臣一座の演目で、4が宮内大臣一座の作品である。つまり3年間の推定初演目数の合計109のうち、海軍大臣一座は84、宮内大臣一座は13（または12）である。一方この3年間の作品109のうち古版本（二つ折本による出版も含む）が現存するのは、1598年が5、1599年が15、1600年が12（うち4は1642年の劇場閉鎖以降に出版）、計32（約29パーセント）

である。これは、上演された劇作品のうち3割弱が出版されたことを意味しない。周知のように海軍大臣一座と宮内大臣一座は、16世紀末ロンドンの劇団をリードした二大劇団であった。*Annals* に記載された宮内大臣一座の演目数が海軍大臣一座に比べて少ないのはおそらく、一座の演目数が少ないからではなく、宮内大臣一座にはヘンズロウの「日記」のような資料がなく、海軍大臣一座ほど演目に関する資料が残っていないからである。実際、宮内大臣一座上演作品数がライバル劇団よりかなり少なかったと考える理由はないのである。宮内大臣一座のシェイクスピアの作品が人気を博して、そのリヴァイヴァル上演の頻度が高くなり、結果として海軍大臣一座より少ない演目数で興行することができたという可能性もないではないが、海軍大臣一座のレパートリーにも後述するような人気作品が含まれていたから、両劇団の演目数に大きな差があったとは思えない。しかし、この3年間の宮内大臣一座の創作初演目数をやや少なめに見積もって、計50であったとしてみよう。さらに、他の劇団の演目で関係資料が完全に失われてしまって、記録の残っていない芝居もいくつもあるだろう。これらすべてを合計して、3年間に上演された芝居の数を仮に160であったとする。これを分母とし、戯曲古版本数32を分子として計算すると、0.2という数字が導き出される。すわなち、版本として出版されたのは、劇団が上演した全芝居のうち20パーセントということである。上掲の3年間の推定初演目数は、内輪の見積もりである。実際の出版率はもっと低かったかもしれない。ちなみに、最も詳細な記録の残る海軍大臣一座の上記3年間の演目の出版率は、約15パーセントである。

ヘンズロウの「日記」は、1592年から1603年までに海軍大臣一座、ウスター伯一座他の劇団が上演した演目計280に言及しているが、その280本の作品で古版本が現存するのは30（11パーセント弱）である。つまり、ヘンズロウの係わった劇団が上演した戯曲については、9～10本に1本しか出版されなかったかもしれないのである。[57] これをどのように見たらよいのであろうか。世紀末の劇団は、約1割の脚本しか出版者に提供しなかったということだろうか。だとすれば、ファーマー・レサーの主張のように、脚本の供給が不足していて、書籍商は出版したくとも出版できなかったということになるであろう。ここで注目すべきは、出版されているのは、マーロウの芝居など劇場での人気作品であるという点である。例えば1597年の海軍大臣一座の演目の中で、古版本が現存するのは、*Doctor Faustus*、*The Spanish Tragedy*、*The Blind Beggar of Alexandria*、*Captain Thomas Stukeley*、*An Humorous Day's Mirth* の5本であるが、これらは、ヘンズロウの「日記」に記録された上演回数から判断して、いずれも高い人気を博したのだろうと推測される。*Doctor Faustus* と *The Spanish Tragedy* の上演回数は群を抜いており、たいへん人気があった芝居であったことは疑いえない。「日記」の1592年2月以降の記録によれば、1597年の10月末までに、*Doctor Faustus* は25回目の上演が行われ、*The Spanish Tragedy* は29回目の上演が行われている。[58] *The Blind Beggar of Alexandria* は、1597年4月に22回目が上演されている。*Captain Thomas Stukeley* と *An Humorous Day's Mirth* の上演回数は上記の劇ほど多くはないが、それでも、前者は6月に10回目の上演が行われ、後者は10月に12回目の上演が行われている。*The Wiseman of Westchester* のように、上演回数は多い（ということは、劇場での人気は高い）にもかかわらず、出版されていない（あるいは版本が現存しない）劇もないわけではない。しかし、「日記」の記録によれば、4～5回以下の上演で続演が打ち切られた芝居で出版されたものは、ほとんどない。1592年6月7

日の4回目の上演を最後に「日記」の記録から消える*A Looking Glass for London and England*(*Annals* によれば、[59] 創作初演年は1587〜91年、初版は1594年)、少数の例外のひとつかもしれないが、演目・上演日ごとの興行収入が「日記」に記録されるのは92年2月以降の上演であって、それより前にこの芝居は何回も上演されている可能性が大きい。以上のように、出版された戯曲の多くは劇場での人気作品であった。上述の*The Spanish Tragedy* と *Doctor Faustus* は、このことを端的に裏付ける作品である。劇場で大人気を博した両劇は、先に触れたように、この時代の戯曲本ベストセラーの第2位と第3位である。劇場の人気作品は、出版市場でもよく売れたのである。劇場の人気と出版の相関を最もよく表しているのは、シェイクスピアの作品かもしれない。もし私たちが今日知るシェイクスピアの全作品が、シェイクスピアの書いた全作品だとすると、出版率は100パーセントである。二つ折本のテクストを勘定に入れずに四つ折本だけで計算しても、50パーセントを超える出版率である。ブレイニーは、1583年から1642年までに出版された戯曲を370(リプリントを含む戯曲本は606)としている。シェイクスピアの作品数を仮に37として計算すると、ちょうど1割がシェイクスピアの劇である。これは非常に高い比率である。しかも、シェイクスピアの戯曲本は、リプリントでも多く出版されている。二つ折り本が出版された1623年までに出版された四つ折本のリプリントだけでも30を超える。シェイクスピアの作品は、戯曲本市場の中で特に人気があったのである。そのシェイクスピア劇が劇場でも大きな人気を集めていたことは、種々の記録から明らかである。

出版された戯曲の多くが劇場での人気作品であったとすれば、書籍商は戯曲を出版を決める際に、芝居としての人気が高いかどうかをひとつの判断基準にしたのだろうと考えるのが合理的である。もちろん、ベン・ジョンソンの芝居のように、[60] 劇場ではかならずしも受けがよくなくても出版されているものもあるから、劇場での人気だけが出版をするかしないかの決め手になったのではないだろう。また、エリザベス一世時代とジェイムズ朝以降とでは、戯曲に対する出版者や著者の姿勢は異なっていて、時代が下がるにつれて、劇の出版率は高くなってゆく傾向が見られる。[61] しかし、書籍商の出版の第一の目的は利潤を得ることであって、採算を度外視して出版する書籍商はまずいなかっただろう。この点で、劇場で人気を博している作品は、書籍商にとって魅力的であっただろうと思われる。[62] というのも、利幅はそれほど大きくなくとも、より確実に利益を得られたであろうし、なによりも、出版によって損失を被る可能性が小さかったであろうからである。問題は、利潤をあげることを第一の目的とする「投機的」な書籍商の食指を動かすような脚本が演劇市場に流通していたかどうかである。おそらくそのような脚本はそれほど多くなかったのである。少なくともシェイクスピア時代の芝居の大半は、投資対象としては魅力がなかったのである。だからこそ、上演された劇のごく一部しか出版されることはなかったのである。劇団が生産する戯曲は少なくなかった。書籍商が出版しようと思えば、脚本を入手することはおそらく簡単であった。しかし、宗教書が圧倒的なシェアを誇るこの時代、戯曲本などの「文芸書」の読者層は限られていたから、損失を出さないようにするには出版する脚本を厳選する必要があっただろう。そのような経済的観点から見ると、ロンドンの演劇市場には出版に値する脚本の流通は少なかったのである。

では結局、戯曲本は人気があったのか、なかったのか。たしかに、1583年から1642年までの

60年間の戯曲本の市場占有率が2.77パーセントというのは、かなり高い数値である。現代の書籍市場で戯曲本の比率がそんなに高いということは絶対にありえないから、当時の戯曲本に対する関心は現代人のそれをはるかに凌いでいたということはできる。その意味では、現代より人気があったのである。しかし、英国ルネサンス期の出版市場は現代のように多様でもなく、大きくもなかった。そういう状況で、2.77パーセントという数字がどれほどの意味をもつか判断がむずかしい。2.77パーセントという数字は決して小さくはないけれども、版数で言えば、わずかに10である。[63] 仮に1回の出版で800部が出版されたとすれば、年間の戯曲本の総発行数は、8000部である。1600年ごろのロンドンの人口は、約20万であった。人口比に対して高い部数のように思われるかもしれない。しかし当時は、現代とは比較にならぬくらいに演劇人口の比率は大きかった。Alfred Harbageの推定によると、ロンドンの演劇人口（1日の平均観客数）は、2500（1595年）から3500（1605年）である。[64] 平均3000とすると、ロンドンの人口約20万の1.5パーセントである。年間150〜200日の上演が行われたとすると、1年間の延べ観客数は45〜60万である。大人も子どももすべて含めて、1人あたり年間約2〜3本の芝居を観ていたことになる。これは驚くべき数字である。今日と違って娯楽の少ない時代、シェイクスピア時代の劇場はそれほど活況を呈していたのである。この数字と比べると、識字率の低い時代とはいえ、戯曲本の出版は著しく少ないと言わざるをえないだろう。やはり、戯曲本は供給が追いつかないほどどんどん売れた人気ジャンルであったと結論するのはむずかしい。「戯曲本に対しては一定の需要は存在していたが、強い需要ではなく、満足のゆく利潤を獲得することができたのは、適切な時点で適切な戯曲を入手できる幸運なあるいは才覚のある書籍商だけであった」というブレイニーの指摘が妥当な結論のように思われる。

---

[1] R. B. McKerrow, *An Introduction to Bibliography for Literary Students*, introd. David McKitterick (Winchester: St. Paul's Bibliographies, 1994) 134.

[2] この問題に関する旧説と近年の学説の趨勢については、Alan B. Farmer and Zachary Lesser, "The Popularity of Playbooks Revisited," *Shakespeare Quarterly* 56 (2005) : 1-2 参照。

[3] Peter Blayney, "Publication of Playbooks," *A New History of Early English Drama*, ed. John D. Cox and David Scott Kastan (New York: Columbia UP, 1997) 383-422.

[4] Blayney, "Publication of Playbooks," "Publication of Playbooks," 383-84.

[5] Blayney, "Publication of Playbooks," 384.

[6] Roslyn L. Knutson, "The Repertory," *A New History of Early English Drama*, ed. Cox and Kastan, 461-80. Knutsonによれば、エリザベス朝の劇団は、戯曲本（四つ折本）を入手したり他の劇団の作品を盗用したりするのではなく、人気作品と同一または関連の題材を扱った新作を購入するのがふつうであった。Knutsonは、*Playing Companies and Commerce in Shakespeare' Time* (Cambridge: Cambridge UP, 2001) においては、シェイクスピア時代の劇団は相互に敵対していたのではなく、ギルドの同業者間のような協力的関係にあったと論じている。

[7] Blayney, "Publication of Playbooks," 384-85.

[8] Blayney, "Publication of Playbooks," 387-88.

[9] Blayney, "Publication of Playbooks," 389.

[10] Blayney, "Publication of Playbooks," 391.

[11] Blayney, "Publication of Playbooks," 389.

[12] Blayney, "Publication of Playbooks," 416.

[13] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 2-3.

[14] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 4.

[15] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 4-6.
[16] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 6.
[17] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 13.
[18] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 13-14.
[19] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 14-16.
[20] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 18.
[21] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 16-18.
[22] 戯曲本の人気の指標としてのリプリントに関する以下の議論については、Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 18-24 参照。
[23] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 20. ただし、"sold like hot cakes"というフレーズは、Blayney, "Publication of Playbooks," 384 からの引用。
[24] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 24.
[25] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 25.
[26] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 25.
[27] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 25-26.
[28] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 27.
[29] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks, " 27-28.
[30] Peter Blayney, "The Alleged Popularity of Playbooks," *Shakespeare Quarterly* 56 (2005) : 35.
[31] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 37.
[32] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 38.
[33] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 39.
[34] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks,"40-41.
[35] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 41.
[36] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 41
[37] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 42.
[38] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 19.
[39] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 43.
[40] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 43.
[41] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 44.
[42] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 45-46.
[43] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 46.
[44] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 48.
[45] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 46-47.
[46] Blayney, "Alleged Popularity of Playbooks," 47.
[47] Alan B. Farmer and Zachary Lesser, "Structures of Popularity in the Early Modern Book Trade," *Shakespeare Quarterly* 56 (2005) : 208.
[48] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 209.
[49] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 209-210.
[50] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 210..
[51] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 211-13.
[52] Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 4.
[53] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 211.
[54] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 212.
[55] Farmer and Lesser, "Structures of Popularity," 213.
[56] Douglas A. Brooks, *From Playhouse to Printing House: Drama and Authorship in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge UP, 2000) 172. Brooks が参照している Harbage の *Annals* は 1989 年刊行の第 3 版（Sylvia Stoler Wagonheim による改訂版）であるが、以下に提示する筆者のデータは、Alfred Harbage, *Annals of English Drama, 975-1700*, rev. S. Schoenbaum (London: Methuen, 1964) による。
[57] David Bergeron は、英国ルネサンス期において「出版は劇執筆の本質的特徴となった」としているが、少なくとも劇の出版率から判断するかぎり、宮内大臣一座と海軍大臣一座の劇作家についてそのよう

に主張するのはむずかしい。David Bergeron, *Textual Patronage in English Drama, 1570-1640* (Hants: Ashgate, 2006) 3 参照。

[58] *Annals*（1964）によれば、*The Spanish Tragedy* の創作初演年は 1582〜1592 年である。「日記」に記された最初の上演日は、1592 年 3 月 14 日である。このときのヘンズロウの興行収入からの受領額は、3 ポンド 11 シリングである。1 ポンド前後の受領額が多いこの頃の収入としては、非常に大きい金額である。29 回目の上演（1597 年 10 月 11 日）の受領額は、「日記」の数字に判読できない部分があって確実ではないが、2 ポンドとしている編者が多い。Neil Carson, *A Companion to Henslowe's Diary* [Cambridge: Cambridge UP, 1988] 100、F. A. Foakes and R. T. Rickert, eds., *Henslowe's Diary* [Cambridge: Cambridge UP, 1961] 60 参照。初演からかなりの年数を経たリヴァイヴァルでこれだけの収入があったとすると、驚くべき稼ぎっぷりであって、この芝居がそれだけ客を呼べる芝居だったということである。

[59] Foakes and Rickert, *Henslowe's Diary*, 19.

[60] *Sejanus*（1605 年初版）の第 2 版（1616 年出版）に付せられた Aubigny 卿への献辞には、グローブ座での上演が失敗であったことが示唆されている。Ben Jonson, *Sejanus*, ed. Jonas A. Barish (New Haven: Yale UP, 1965) 25 参照。この劇は、1616 年出版のジョンソンの『全集』にも収載されている。ジョン・ウェブスターの *The White Devil*（1612 年初版）の読者への序文にも劇場公演が不入りであったと記されている。John Webster, *The White Devil*, ed. John Russell Brown, 2nd ed. (Manchester: Manchester UP, 1966) 2 参照。フランシス・ボーモントの *The Knight of the Burning Pestle*（1613 年初版）には、この四つ折本の出版者 Walter Burre による Robert Keysar（王妃祝典少年劇団の座主）宛の献辞がついている。献辞によれば、観客はこの劇を「まったく拒絶した」という。Francis Beaumont, *The Knight of the Burning Pestle*, ed. John Doebler (1964; London, Edward Arnold, 1975) 3 参照。

[61] 母数が少ないので確たることは言えないが、チャールズ朝の戯曲の出版率はかなり高いように思われる。Henry Herbert が祝典局長の実権を得て戯曲の検閲・認可を始めた 1623 年以降については、局長記録簿の記載から、Herbert が認可した演目がかなり分かっている。タイトルが判明している劇の数と、その中で出版された作品の数を次に示す。1623 年以降 5 年ごとの合計数である。左から順に「年 / 認可演目数 / 出版戯曲数 / 出版率」を表す。1623-27 / 49 /18 / 37% ; 1628-32 / 23 / 18 / 78% ; 1633-37 / 25 / 19 / 76% ; 1638-42 / 16 / 11 / 69%. *Annals*, 114-145 参照。

[62] シェイクスピア劇の古版本をはじめとして、16-17 世紀の戯曲のタイトルページには、その劇場公演が好評を博したことを強調するかのように、「何度も演じられた」といった文言がしばしば現れる。あるいは、より直裁に「好評を博した」とか「大喝采を受けた」と記しているものもある。後者は、特にチャールズ朝の版本に多く見られる傾向である。W. W. Greg, *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration*, vol. 2 (London: Bibliographical Society, 1951) 560, 574, 579, 600, 609, 611,671, 720 参照。これらは型どおりの宣伝文句かもしれないが、劇場での人気は戯曲本のセールスポイントだと書籍商に認識されていたことを裏付けるものだろう。

[63] 注 61 でも触れたが、チャールズ朝には戯曲本の刊行率が高くなっている傾向が見える。1633 年から 1642 年のピーク時には、初版とリプリントとを合わせて計 154 版（年平均約 15 版）が出版されている。しかし、この時代は書籍市場全体も（16 世紀末の 2 倍に）拡大していて、戯曲本の市場占有率はさほど高くはなく、3.04 パーセントにとどまっている。Blayney, "Alleged Popularity," 48 参照。Bergeron は、James P. Saeger and Christopher J. Fassler, "The London Professional Theater,1576-1642: A Catalogue and Analysis of the Extant Printed Plays," *Research Opportunities in Renaissance Drama* 34 (1995): 67 を引用して、1631 年から 1640 年までの 10 年間に年平均 25 以上の戯曲本が出版されていると記しているが、これは過大な数字である。Bergeron, *Textual Patronage*,185 参照。ちなみにファーマー - レサーによれば、1629 年から 1640 年までに出版された戯曲本は、計 206（初版 122、リプリント 84）、年平均 17 である。Farmer and Lesser, "Popularity of Playbooks," 7 参照。

[64] Alfred Harbage, *Shakespeare's Audience* (1941; New York: Columbia UP, 1969) 37-38.